

ダンジョンに転生者がいるのは間違っているだろうか

ヘンリー発生

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうかの世界に2人の転生者をぶち込む話。

ノリと勢いだけで書いてます。

目次

第二話  
第一話

8

1

# 第一話

ダンジョン

深層域 49階層。今ここでは凶悪なモンスターと複数種族の亜人とヒューマンの一団が争っていた。

山羊のようなねじ曲がった二本の大角。馬面の醜悪な顔面に真っ赤な眼球が蠢いている。巨人のような巨軀を持った怪物——フォモール——の大群が、が咆哮を轟かせながらその太い腕に鈍器を持ち、津波が如く目の前の小さな者たちを押し潰さんと進撃している。

その進撃を受け止めるのは掲げられた多くの大盾。踵を地面にめり込ませながらも、自分たちの後ろに行かせまいと力の限りを尽くす。後ろの後衛では矢や魔法を絶え間なく打ち込んでいる。前衛と後衛の間には風にはためく

道化師のエンブレム。

オラリオでもトップクラスの實力を誇る【ファミリア】の一つだ。彼らは遠征の真っ最中、未到達階層を目指し此処49階層まで来たのだ。

「ティオナ、ティオネ！左翼支援急げッ！」

小柄な少年——

小人族の首領が支持を飛ばす。

「あくんっ、もう体がいくつあっても足りなーいっ！」

「つべこべ言わずに働きなさい」

支持を受けたアマゾネスの姉妹がフォモールたちを斬り伏せる。だが、それでもまだフォモールの大群は尽きることがない。盾を構える前衛の陣形は押されておりその半円は小さくなっていく。

「リヴェリアアッ、まだなの〜!？」

その声の向かう方向、後衛の中心には細く尖った耳を生やした絶世の美貌を持つエルフの女性が杖を水平に構えて詠唱を紡いでいる。

「——間もなく、焔は放たれる」 「忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。



「……すっげえ」

誰かが呟く。

斬撃の嵐。その嵐の中に入ったモンスターたちは その体を次々と斬り裂かれ絶命する。

その中心には多くの者に畏敬の念を抱かせる【剣姫】の姿があった。

【汝は業火の化身なり】

【ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを】

皆が待ち望んでいた魔法の詠唱が完成に近づく。

「アイズ、戻りなさい！」

その声を聞いたアイズは跳躍。自陣の中央に着地する。

【焼きつくせ、スルトの剣——我が名はアールヴ——！】

音が弾け、魔法円 が拡大し、アイズ達の、全てのフォモール達の足もとにまで広がった。 効果範囲は全戦域。 そしてエルフの魔導士、リヴェリアが『魔法』発動する。

【レア・ラーヴァテイン】！！

大炎。

天に昇る炎柱。フォモール達を丸呑みにし、その体を焼き尽くす。劫火にモンスターが消え、絶叫が響きわたる。

広範囲殲滅魔法。熱気と火の粉によって世界が灼熱に満たされる。全てを紅く染め上げる中、アイズ達『冒険者』顔も緋の色に染まっていた。

「ア、アイズさんー！」

山吹色の髪を後ろでまとめた少女がアイズを呼び止める。髪から覗く尖った耳、容姿端麗なエルフの少女だ。

「さ、先程は助けて頂いて、ありがとうございました！いつもいつも足を引っ張ってしまって……そのっ、あのっ、すみませんでした！」

「……レフイーヤ、怪我は大丈夫？」

そう尋ねるアイズに何度も頭を下げるレフイーヤ。

感情の表現が苦手なアイズは困り果ててしまう。

考えた末にレフイーヤの山吹色の髪に手を置き、ゆっくりとぎこちないが優しく撫でる。

泣きそうになるレフイーヤはアイズが持っていた天幕の布地を「も、持ちます!」と言って奪う。

「――アーイズ!」

「ティオナ……」

ティオナと呼ばれた少女がアイズに飛び付く。健康的な小麦色の肌。

その顔立ちは整っており、彼女持ち前の快活さが十二分に滲み出ている。

服装 はアマゾネス特有の踊り子のような衣装で、露出が多い。

上は薄い胸周りを覆う布一枚、腰には長いパレオを巻いている。腹回りやしなやかな肢体をおしみなく晒している。

「何してるの、レフイーヤ? アイズに慰めてもらってた? 気にしない方が良いのに、大荒野で怪我しない方が珍しいんだから。で、アイズは何であんな無茶したの?」

「……」

「あたし止めたのに。壁を維持するだけでも良かったのに、そんなにあたし達は頼りない?」

「……ごめん」

アイズは彼女を心配させたことも含めて謝るしかなかった。ティオナはぶーぶー言いながらアイズに抱きつく力を強くする。が、それは長くは続かなかつた。頭部に獣耳、腰から尻尾を生やす鋭い毛並みの

狼人の青年がティオナを蹴り付けたか らだ。

「痛ーっ!? 何すんのさベート!」

「気色悪いもん見せんじゃねえよ。寒気がする」

「うるさいよ! このアイズにちよっかい出したいだけの格好付け!」

「なっ、この野郎、喧嘩売ってんのかッ!」

「やーい、凶星いーっ！残念狼いーっ！へタレベートオー！」

「このっ、ど貧相アマゾネスがあああああああああ あああああ?!」

「ど貧相言うなあああああああああああ!!」

「どんどんヒートアップしていくベートとティオナの口喧嘩にオロオロするレフィーヤ。場は一瞬で混沌と化していた。」

「見当はつくけど一応聞いとくわ、何やってんのよあんたら」

「……ティオネ」

騒ぎを聞きつけたアマゾネスの少女がアイズの隣に来る。腰まで届く長い髪型と雰囲気、後は一部の胸囲を除けば、ティオナと瓜二つだ。

彼女はティオナの双子の姉、着ている服もほとんど同じで同じ髪型、同じ服装をすればどっちがどっちか分からないだろう。

「アイズ、団長が呼んでたわよ。あれは私がやっておくから」

「……ごめんね」

「いいから、さっさと行きなさい。——あんた達、遊ぶ暇があるなら野営の準備を手伝いなさい」

アイズはその場から立ち去り、準備中の野営地を進む。目指している大きな天幕の横にたっている旗には滑稽な道化師が刻まれている。

「ロキ・ファミリア」。

アイズ達の所属するファミリアの名だ。 迷宮都市オラリオの中でも一二を争う強さを誇るファミリアだ。今はダンジョンの未到達階層を開拓するための遠征中なのだ。

「フィン」

「来たね、アイズ」

「がははっ、今ちようどお主の話をしておったところだ」

「ガレス……今は笑うな」

天幕に入ったアイズを迎えたのは三人の亜人。  
レフィーヤと同じ容姿端麗なエルフの女性、リヴェリア・リヨス・アールヴ。

たくましい筋骨隆々な体付きをしたドワーフ、ガレス・ランドロック。



そして通常の人間の半分の背丈しかない

小人族の 少年、フィン・ディムナ。

この三人が、「ロキ・ファミリア」の最高幹部たちである。

「さてと、単刀直入に聞くよアイズ。どうして前線維持の命令に背いたんだい？」

深い知性を感じさせる碧眼がアイズを射抜く。誰 よりも幼い外見であるが彼が「ロキ・ファミリア」の団員全てを統括するトップだ。「アイズ、君は強い。幹部である君の行動は少なからず下の者達に影響を与える。それを覚えてもらはないと困る」

「……………」

「その立場は窮屈かい？」

「……………ううん、ごめんなさい」

フィンの碧眼に心を見抜かれたアイズは素直に反省して謝る。

「アイズ、ここはダンジョンだ。ここでは何が起きるかわからない。そして皆が皆君のように動くことは出来ないんだ、その事は頭に入れておい てくれ」

「……………うん、分かった」

「その様子だと、ティオナかティオネ辺りに絞られたんだろう。行つていいよ」

アイズは一度頭を下げてから天幕を出る。また今度は来た道を辿りながら準備中の野営地を進む。

「おい、馬鹿ゾネスっ!?何でてめえはテントの一つも張れねえんだよ!」

「う、うるさい!?ベートの教え方が悪いんじゃないか!?私は悪くないもん!」

「レフィーヤ、あのバカ達はいいいから、人を集めて炊事をお願い」

「は、はいっ、わかりました」

そんな光景を目にしながらアイズはふらりと野営地の外れまで歩く。

広がるのは灰色に染まった木々の群れ。

この階層の至るところを埋め尽くす樹木の間には青い水の流れる

川が葉脈状に走っている。

【ロキ・ファミア】が野営地を選んだの

は10M程もある一枚岩の上だ。そこからアイズは景色を眺める。

現在地、ダンジョン50階層。

数多くの冒険者や【ファミア】が存在する中で最前線とも言える。

未だ多くの冒険者が見たことがない景色をアイズは眺めていた。

## 第二話

「それじゃあ、これからの事を確認しよう」

食事を終えた【ロキ・ファミリア】の面々が団長であるフィンに目を向ける。

「遠征の最大の目的である未到達階層の開拓、これに変わりはない。けれど、途中で冒険者依頼をこなしておく必要がある」

「冒険者依頼って……確か、【ディアンケヒト・ファミリア】からのものですか？」

「そうだ。51階層にある『カドモスの泉』から要求量の泉水を採取する」

『カドモスの泉』かあ……面倒くさい。何でそんなの引き受けちゃったの？」

「魅力的な報酬だったし、ファミリア同士の付き合いもあるからな、無視はできない」

「ちっ、あいつら面倒なやつよこしやがって……。 よりにもよってカドモスカよ……」

フィンとリヴェリアの説明にベートが悪態をつく。不満が出尽くしたところでフィンが計画を伝える。

『カドモスの泉』には少数精鋭のパーティを二組送る。無駄な消耗を避け、速やかに泉水を確保してこの野営地に帰還する。質問はあるかい？」

「はい！何でパーティを二つにするの？」

「泉水の注水量が厄介でね、二つの泉を回らないと足りないんだ」

「それに物資にも限りがある。59階層に行くためにも時間をかけずに効率的に進めねばならんだ」

フィンとガレスが説明する。

『カドモスの泉』には大人数では行けないからね。戦力が低くなるけど小回りが利いた方がいい。他に質問があるかい？ないなら、メンバーを選出する」

ティオナが挙手して立候補する。

「はい！あたしやる！アイズも一緒にやる う！」  
「うん」

「そもそも少数精鋭なんだからわたしたち実力者 以外に誰が行くのよ」

「じゃー、ティオネもこっちー！」

「ちよ、まつ、私は団長と……!?!」

ティオナがさっさと三人決める。

リヴェリアはフィンの指示で拠点に残って防衛。

先の戦いで魔力を消耗しているためその回復も兼ねている。

「レフィーヤ。私の代わりにアイズ達のパーティに入れ」

「はいっ！……っつて、えっ!?!私ですか!?!」

「レフィーヤもこっちだねー！」

ティオナに捕まり異議を封じられる。

「これじゃと残りで編成するしかないのう。フィン、ベート、儂じゃろ

……後は」

「ラウル、サポーターでこっちに入れ」

「つて、自分っスか!?!」

「お前以外にラウルはいねえだろうが」

こうして少数精鋭の各四人パーティが完成した。

一班：アイズ、ティオナ、ティオネ、レフィーヤ

二班：フィン、ベート、ガレス、ラウル

「……おい、あいつら大丈夫か?」

「んー……」

アマゾネスの狂戦士であるティオナ、

『戦姫』という非公式の渾名のあるアイズ。

猫をかぶっているがティオナ以上に凶暴なティオネ。

そんな彼女らを格下で気の弱いレフィーヤが御しきれることは不可能だ。

「……ティオネ、君だけが頼りなんだ。僕の信頼を裏切らないでくれ」

「——お任せくださいツツ!!必ずや団長の信頼に応えてみせますツツ

!!

「……ティオネちよろーい」

フィンにぞっこんのティオネは何のためらいもなく了承する。そんな姉を見て妹が呆れ顔で呟いていた。

「ねえねえ、今日あんまりモンスターと出くわさないよね」

「出くわさないならそれに越したことはないでしょ。戦わなくていいなら、願ったりよ」

数時間の休息を取り、51階層の『カドモスの泉』を目指して出発したアイズ達、モンスターとの戦闘を消化しながら進んでいた。

「そろそろ泉ね……今の内に注意事項を確認しとくわよ。目的は泉水を確保すること、だけどカドモスとの戦闘は避けられないわ」

「あの、カドモスつてそのものすごく強いんですね」

「パワーだけならこれまでのモンスターの中でも一番かなー」

「やり過ぎせないんですか?」

「無理よ。泉水だけ手に入れて逃げようってんなら間違いなく、死ぬわ」

「あたしなんて吹っ飛ばされてさー、体中がぐちゃぐちゃになったことあるしねー」

ティオナの体験談に血の気が引くレフィーヤ。そんな彼女を見てティオネは作戦を伝える。

「アイズとティオナ、私の三人がカドモスを抑え込む。レフィーヤはでかい魔法を撃ち込んでちょうだい。魔法で怯んだところを私達が畳みかけて仕留める。それから泉水の採取よ」

「……分かった」

「レフィーヤ、期待してるよー!」

「は、はいっ」

泉へと続く道の終わりは目と鼻の先だ。この先の——ルーム——にカドモスの守護する泉がある。ティオネを先頭にして進む一行。パーティに緊張が走り、ティオネの合図を待つ。

だが、アイズが違和感に気付く。

「……おかしい」

「えっ？ちよ、ちよつと、アイズっ」

「静か過ぎる」

違和感を確かめるべくルームに足を踏み入れる。その先には惨状が広がっていた。生えていた木はほとんどがへし折られ、地面や壁には何かが暴れたような罅が入り、破片が散乱していた。

さらにルームの至るところに溶かされたような跡がある。濃い紫に変色した木々からは今も黒煙と一緒にすさまじい異臭が漂っていた。ルームの奥には破壊の爪痕が全くなく、まるで聖域のように守られた泉があった。神秘的な光景を創り出している泉の前には、大量の灰。

「……カドモスの、死骸？」

莫大な量の灰はここを守護していたはずの竜の巨体の規模とほぼ等しい。周囲の状況から見てもこの灰が強竜だったものに違いない。

「ドロップアイテムが回収されてない……」

「どういうこと？」

「このカドモスを殺したのが冒険者じゃないってことよ。つまり、冒険者じゃない何かがここにいたのよ、しかも強竜を殺せるほどの奴がね」

沈黙が落ちる。

「とにかく、嫌な予感がするわ。早いところ戻りましょう」

ティオネの言葉に従いルームを出た直後――

『――あああああああああああああああああああああああああああああああつっ!?!』

凄惨な人の絶叫が迷宮に木霊する。その悲鳴にアイズ達は弾かれたように加速する。

「今の声って!」 「ラウル……!」

通路を幾度も曲がり、悲鳴の方角へと走る。するとアイズ達の視界にモンスターの姿が飛び込んできた。

ぶくぶくと膨れ上がった柔らかそうな黄緑色の表皮に、ところどころには極彩色が刻まれておりその毒々しさを増している。

下半身は無数の短い多脚からなり、芋虫と似た形状をしている。  
上半身は小山のようで扁平状の腕が左右から伸びている。そんなアイズ達ですら見たことのないモンス ターが迷宮の壁や天井を削りながら進んでいた。

「団長っ!?!」

「っっ!」

「止せ、テイオナー!」

フィン達がモンスターから逃げているのを見て ティオネが叫ぶ。テイオナはモンスターの進撃を 止めようと制止を振り切り、斬り掛かる。しかし ——  
じゅうつ。

彼女の愛用している

ウルガ 大双刃の片方の剣身が敵の体に埋まったことにより跡形もなく溶けたのだ。

『アア!!』

モンスターが咆哮を上げ、腐食液を吐き出す。 ティオナはすぐさま回避しフィン達と共に逃げ出す。

「ちよつと何あれー!?!何で教えてくれなかったのー!?!あたしの大双刃がっ!?!」

「フィンが止めてただろうが、この馬鹿ゾネス!!」

精鋭集団全員での猛退散、内一人にいたっては涙目である。

「僕達もあのモンスターの突然襲われてね、こうして逃げてきたんだ。それにあのモンスターは近付いたものは何であれ全て襲っている、モンス ターでもお構い無しだ」

「団長、実は私達が向かった『カドモスの泉』が荒らされていました。強竜も倒されてドロップアイテムだけが」

「強竜まで倒すとはね。これは決まりかな。とりあえずラウルの治療を早くしないと。このまま速度を限界まで上げてあのモンスターを振り切る。そのまま野営地点まで撤退するぞ」

フィンの指示に従い速度を上げる第一級冒険者達。

「ただの杞憂だといいいんだけど……」

そう言つてフィンは自身の右手の親指をぺろりと舐める。その顔はとても深刻なものだった。

野営地に戻つたアイズ達を待っていたのはおびただしい程の数の芋虫型のモンスターだった。

キャンプを襲つているモンスターを全て倒すも、新たに人形のモンスターが現れる。芋虫型と同じ下半身だが、上半身は滑らかな線を描く人型。二対四枚の扁平状の腕、後頭部からは管のような物が何本も垂れ下がっている。さらにその攻撃は厄介なものがあり、四枚の扁平状の腕から出る爆発する鱗粉に芋虫型モンスターと同じ腐食液攻撃を繰り返してくる。

フィンはこのモンスターを相手に撤退する事を決定し、アイズに時間稼ぎを命令していた。そして 撤退完了し、今日目標撃破の許可が出された。

その途端にモンスターを圧倒し出すアイズ。片側の足を全て斬り落とし、更には腕も斬り落とす。落ちた衝撃で鱗粉が舞い上がり、爆発。その爆発 が更に爆発を呼び、女体型モンスターが炎に包まれる。

その際にアイズは己の魔法『エアリアル』を最大出力にする。

キャンプがあつた一枚岩に着壁し、一気にその嵐を身にまとい開放する。

「リル・ラフアーガ」

一撃必殺の矢はまさに、神風。

残つた腕を重ねて盾にするも、それごと貫き穿つ。風穴を開けられた女体型はその全身を膨張させ、芋虫型モンスターとは比べものにならない、桁外れの大爆発を起こした。

アイズの戦闘を見守つていた「ロキ・ファミリア」にまでその余波が届くほどの爆発。50階層が 火の海になる。

その炎を風で割りながら歩み出てくるアイズ。その少女の姿を目にした途端、空気が割れんばかりの大歓声が巻き起こった。

顔をほころばせるレフィーヤ。



そんなレフイーヤ に抱き着くティオナ。

その妹の様子に呆れるティオネ。

若干不満そうだがうつつすらと安心が見え隠れしているベート。

大声で笑うガレス。

微笑を浮かべるリヴェリア。

軽く息を吐き安堵の笑みを浮かべるフィン。

様々な反応を示す皆の顔は喜びと安堵の表情だ。

だが――

ピシッ

その音は小さいものだったが、この深層まで到達できる冒険者達の耳には充分聞き取れる音量だ。その音はどんどん増え、大きくなつていく。今まで幾度となくダンジョンに潜ってきた彼らにとつてその音はとても馴染み深く、そして不吉の前触れの様なものだった。

――アアアア!!!」

アイズが女体型を撃破して出来た火の海が治まってきた場所の地面が割れ、先ほどと同じ女体型が姿を現し、同時に芋虫型モンスターも溢れ出てきた。さらには今から通ろうとしていた49階層へと繋がる道も芋虫型モンスターで埋め尽くされてしまった。

「おいおい!? 何でまた出てくるんだ よ!?!」

「ここは安全階層じゃなかったの!?!」

「異常事態ってこと?」

「まずいな、退路が塞がれた」

「どうするんじや? もう武器も物資もほとんど残ってないぞ」

「アイズも戦闘を終えたばかりだ、精神力が回復していない」

「アイズとリヴェリアは出来るだけ精神力を回復させるんだ。それ以外は時間を稼ぐんだ、急げ!」

ロキ・ファミアリアの面々が驚愕しているなか、フィンが冷静に指示を出す。女体型とは距離があるためすぐに戦闘になる事はないだろうが、芋虫型モンスターは背にしていた通路から出現したためすぐ

さま接敵するだろう。

ロキ・ファミアと芋虫型モンスターの距離が10メートル  
になった時――

「蒼乱煉獄！！」

炎が弾けた。

蒼い炎。

その炎は芋虫型モンスターを呑み込み焼き尽くした。呆気にとられるロキ・ファミアを前に炎は治まっていきその奥から2人の人影が歩み出てきた。